地方独立行政法人
埼玉県立病院機構
Saitama Cancer Center News

がんセンターだより

第 71 号
令和6年3月31日発行
発 行
埼玉県立がんセンター
発行責任者
病 院 長
影 山 幸 雄

基本理念 "唯惜命"

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、がんで苦しむことのない世界をめざします。

目次

副病院長退任のご挨拶……1
What's new! そして感謝……2
クリスマスイベント……3
研究所でサイエンスサロンを開催しました／第48回埼玉県民のための"がんの集い"を開催しました。……4

埼玉県のマスコット コバトン

副病院長退任のご挨拶

埼玉県立がんセンター 副病院長
佐川　みゆき

副病院長の佐川みゆきでございます。退任にあたりご挨拶を申し上げます。

私は、当センターで新人看護師として看護のスタートを切った後、3つの県立病院及び行政機関、看護師・介護職の養成機関を経験した後、再び当センターに戻り看護管理者として勤務しました。新人時代を過ごした当センターに、最後に戻ったことは、まさに運命だと思っています。それと同時に、育てていただいた当センターとがん患者さんに恩返しがしたいと思い、看護副部長、看護部長、副病院長として6年間走り続けました。

2019 年に看護部長に就任した時は、新型コロナウイルス感染症が日本の社会全体に大きな影響を与えた年であり、これまで経験したことのない出来事の中で、意思決定の連続でした。何よりも、がん看護を志し入職している看護師が、一般の救急患者の受け入れを経験したことがない中で、コロナ患者の受け入れを行う事は、極めて困難な事でした。その中で、看護管理者をはじめとする多くのスタッフとの対話を繰り返し、看護部一丸となり頑張ったことは、現在も困難に立ち向かう時の原動力になっています。その後も、コロナ患者受け入れは続いていますが、そのような中でも、看護のトップマネージャーとして在籍した中で取り組んだことが主に2つあります。1 つ目は、看護のやりがいプロジェクトである『認め合い支え合い成長する看護プロジェクト（通称 MSS プロジェクト）』です。お互いを認め合いがん看護のやりがいを見出し、生き生きと働き続けられることが、がん看護の質向上に繋がるものと信じて取り組みました。その結果、看護職員の職務満足度は年々上昇し、離職率も低下しました。今年度から始めている多職種連携 MSS を継続し、センター全体でお互いを認め合う組織風土をつくってほしいと願っております。2 つ目は、『患者サポートセンターの設立』です。看護部長就任当初から、地域連携・相談支援センターと周術期センターがありました。私は、当センターの基本方針である「日本一患者と家族にやさしい病院」を実現するためには、入院前から退院後まで、いつでもがん患者さんとそのご家族の様々な悩みや困りごとに総合的に対応できる組織を創りたいと思っていました。そこで、まず周術期センターを入退院支援センターへ名称変更すると共に対象を拡充し、より多くの入院患者さんに活用していただけるようにしました。その後、既存の地域連携・相談支援センターと新たな組織である入退院支援センターを統合して患者サポートセンターを設立し、患者サービス向上に努めております。これらの取り組みは、病院長、看護管理者をはじめとするスタッフの皆様の理解と協力なしには成し遂げられなかったと思います。心から感謝申し上げます。

最後に、がんセンターが 5 年後、10 年後もがん患者さんのために、発展し続けることを祈っております。

What's new! そして感謝

乳腺腫瘍内科 科長兼診療部長　井上　賢一

2024 年 3 月に定年を迎え、がんセンターを去るにあたりご挨拶をさせていただきます。1988年4月埼玉医科大学第四内科（現・内分泌・糖尿病科）より、乳腺腫瘍内科の前身、内分泌科・田部井敏夫元院長の下、内分泌内科医として赴任しました。外来で甲状腺疾患や糖尿病と、少しの再発進行乳・甲状腺癌の診療からスタートしました。再発乳癌診療は、薬の選択肢も限られていました。緩和ケア、特に疼痛に対してモルヒネの早期導入を厳しく指導されました。

What' s new.：研究所と臨床医で、遺伝子治療、養子免疫療法や dormancy の研究を行い、能力のなさで一報の論文のみでした。現在は遺伝子工学の進歩やイムノチェックポイント阻害薬の出現で、癌の免疫治療はめまぐるしい進歩しています。一方、乳癌診療は、エビデンスに基づく治療（新薬開発や臨床試験）が、乳癌先進国の欧米よりもたれされ、治験と日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）等の臨床研究に参加しました。内科医として、新薬に携わることで本邦において上梓され際、患者に間断無く導入可能でした。臨床研究、国際交流（オランダ・Susan G. Komen）や内外の学会にて、新しい考え方や知見を学び、埼玉乳がん臨床研究グループ（現埼玉乳がんケア・サポートグループ）で、埼玉の仲間と 37 試験もの乳癌臨床研究を行ないました。試験立案、プロトコール作成、実施、解析、学会発表そして最後に論文が掲載された時の充実感は、最高でした。

院内では、乳がんを考える会（色々な職種の方に乳癌との関わりを発表）を月 1 回のペースで 3 年間開催しました。他部署の考えやその後の意思の疎通に大変役立ちました。主に看護師と共同研究（フローズングローブや毒性）で学会発表、その後の飲み会は楽しかった。臨床検査技師ともバセドウ病や橋本病の超音波結果を発表し、日本語ですが論文化しました。最近では、アンメットニーズの会での提案が、乳がん認定看護師、企業と埼玉県が関わりマインパッドの発売も、貴重な経験でした。

これからの癌診療は、ゲノム解析による治療選択等が、より明確に提起されます。新時代に、老兵は丁度良い潮時と考え、後輩に後を託すのが良いと考えていますし応えてくれると信じています。

感謝：私は、自分の関わった人により良い環境を作れたらと考えてきました。それは、一部の人には、大変負担を与えてしまいました。この場を借りて深謝いたします。がんセンターにおいては、公私ともに大変に有り難うございました。私とつながりのある方々全てに感謝、感謝。

最後に、皆様にお願いがあります。毎年秋に、リレー・フォー・ライフ・ジャパンさいたまが、日本対がん協会主催で開催されています。当センターもブースを出しています。がんサーバイバーが前を向いて歩いているところに応援しに行きませんか？皆様が、興味を持って参加いただけると幸いです。

クリスマスイベント

当センター接遇委員会では、患者さんにやさしい病院づくりを目的として、クリスマスイベントを毎年度企画しております。今年度は、外来や各病棟にクリスマスツリーを設置し、１階正面玄関付近をイルミネーションで飾り付けたほか、新型コロナウイルス感染症の影響で中止していたクリスマスコンサートや聖歌隊を３年ぶりに開催しました。

クリスマスコンサートは、コロナ禍前まで毎年お越しいただいていたボランティアの方をお招きしての開催となりました。当日は多くの患者さんにご来場いただき、グランドピアノの素敵なメロディーと、テノールの荘厳な歌声に聴き入りました。感染対策のため発声できない中、手拍子のみではありますが参加型形式で楽しく聴かせていただきました。心温まるコンサートに参加させていただき、大変嬉しく思います。

聖歌隊は、開院当初から行っている年間行事のひとつです。病院職員でグループを結成し、各病棟を回りながら入院患者さんにクリスマスソングを届けます。今年度は３つのグループに分かれ、「きよしこの夜」を披露いたしました。密を避けるため練習機会があまり設けられない中ではありましたが、大盛況のうちに終えることができました。

今年度のイベントは、コンサートには入場制限を設けたり、聖歌隊はハミングにより実施するなど、感染対策のため規模を一部縮小しており、従来通りの開催は叶いませんでした。しかしながら、コンサート終了後に感動から涙する方や、聖歌隊の歌声に笑顔になっている方を拝見し、不完全ながらも開催することができて本当に良かったと思いました。

少しずつではありますが、季節の行事をはじめとした院内でのイベントが再開してきております。入院生活の中に少しでも癒される時間が提供できるよう、来年度はより一層尽力してまいります。（がんセンター接遇委員会）

▲クリスマスコンサートの様子

▲聖歌隊一同

▲クリスマスツリー

▲イルミネーション

研究所でサイエンスサロンを開催しました

臨床腫瘍研究所　**和田　朋子**

埼玉県民の皆様にがん研究について理解を深めてもらうことを目的として、研究所は 2023 年 11 月 11 日土曜日に第 14 回埼玉県民がんサイエンスサロンを開催しました。

今年度は昭和大学の吉村清先生（臨床薬理研究所 臨床免疫腫瘍学部門 教授 / 医学部 内科学講座腫瘍内科学部門 兼担教授）をお招きして「腸内細菌がかえるがん治療の未来」というタイトルでご講演していただき、32 名ほどの方々が県内からご参加されました。

開催後のアンケート結果から、講演も実習も多くの方に楽しんでいただけたことがわかりました。講演では吉村先生がわかりやすくがんと腸内細菌の研究についてお話してくださったため、ご参加された皆様から大変好評でした。講演を聞いたことが自身の食生活や腸内細菌について改めて考えるよいきっかけとなったそうです。実習もとても好評で、普段目にする機会が少ない DNA を興味深そうに観察していたのがとても印象的でした。

研究棟の改装に伴い講演会場がやや狭くなったり、感染症対策のため余裕を持って席を配置したことが重なり、今年度からサイエンスサロンに参加できる人数が以前に比べて減ってしまいました。そのような中でも多くの方にご興味を持ってご参加いただけたことを大変嬉しく思っています。今後も研究所は埼玉県民の皆様ががん研究の一端に触れるお手伝いをしていきたいと考えています。サイエンスサロンは毎年参加費無料で開催していますので、ご興味のある方はぜひ来年ご参加ください。

第48回 埼玉県民のための"がんの集い"を開催しました。

令和 5 年 12 月 23 日（土）に、「第 48 回 埼玉県民のための " がんの集い "」をさいたま市のソニックシティ国際会議室において開催しました。

今年度は、「患者さんに寄り添うがん医療」を総合テーマとし、診療科の医師や患者サポートセンターのメディカルソーシャルワーカーから「がん医療」に関して、様々な切り口でお話しをしていただきました。

当日は、クリスマス前の土日ということでご予定のあった方が多かったためか、例年と比べると少ない 36 名の方が来場されました。

来場者からは「先ほど話のあった治療方法はどこの医療機関でも希望すれば受けられるのか」等の熱心なご質問をいただいたほか、「大腸がん検診の大切さが分かった」「治療の選択肢、方法という患者目線での話の内容となっており興味がわいた」「がん治療と骨粗鬆症について知れてよかった」「患者サポートセンターの役割がとても分かりやすかった」等のご感想をいただきました。

今年度の「がんの集い」でも、県民の皆様にがん医療の実情について、多面的な視点でお伝えし、情報を共有できる貴重な場であることを改めて確認することができ、実りあるものとなりました。

また、今回の講演をより多くの方にご覧いただけるよう、今年度開設した YouTube の公式チャンネルに講演会の動画を投稿したいと思います。

（がんの集い実行委員会）